エビフリモちゃんの「医療現場へ突撃インタビュー」

みどり市民病院 感染症・総合内科医の
長谷川先生に聞きました!!

ワクチンと検査が、がんを防ぐ時代へ！知っておきたい意外な関係

「感染症とがん」のはなし

Instagram

名古屋市立大学医学部附属
みどり市民病院
感染症・総合内科　教授/部長
長谷川千尋
［はせがわ・ちひろ］

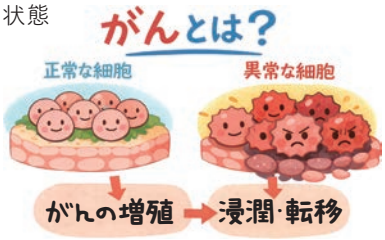
1990年名古屋市立大学医学部卒，博士（医学），
感染症専門医，消化器内科専門医，渡航医学認定医療職

はじめに

がんは日本人の死因の1位を占める病気で、およそ4人に1人ががんで亡くなっています。「がんは生活習慣や体質の問題で起こるもの」というイメージが強く、感染症と関係していることはあまり知られていません。実は世界のがんの約15%は、ウイルスや細菌などの感染症が関与しているということをご存知でしょうか。

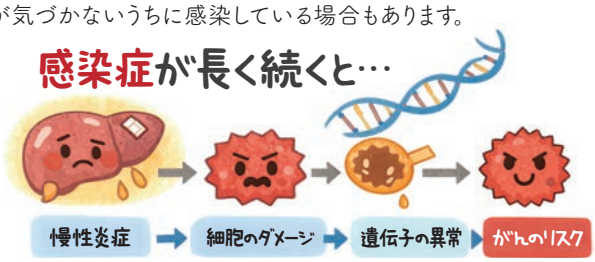
そもそも「がん」ってなに？

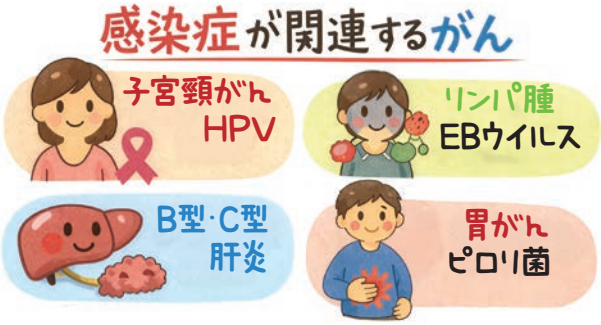
私たちのからだはおよそ60兆個の細胞からできていて、細胞は日々分裂と入れ替わりを繰り返しています。通常、細胞は決められたルールに従って増え、役目を終えると自然に消えていきます。ところが何らかの原因でこの仕組みが壊れ、異常な細胞が増え続けてしまう状態が「がん」です。がん細胞は周囲の組織を壊し、血液やリンパの流れに乗って別の場所に広がることでからだを蝕んでいきます。



感染症とがん

一部のウイルスや細菌は、長い間体の中にとどまり、慢性的な炎症を起こします。この状態が続くと、細胞が傷つく⇨修復を何度も繰り返す⇨その過程で遺伝子に異常が起きる、という現象を繰り返し、がんが発生しやすくなります。たとえばヒトパピローマウイルス（HPV）は子宮頸がんや中咽頭（のど）がんの原因として知られています。また、B型・C型肝炎ウイルスは肝がん、ヘリコバクター・ピロリ菌は胃がんや胃MALTリンパ腫、EBウイルスは鼻咽頭がんや悪性リンパ腫の発生に深く関係しています。これらは決して珍しい感染症ではなく、多くの人が気づかないうちに感染している場合もあります。





ワクチンで防ぐことができるがん

ヒトパピローマウイルスとB型肝炎ウイルスにはワクチンがあります。イングランドの研究では、ヒトパピローマウイルスのワクチンは12-13歳で接種すると子宮がんおよび前がん病変※のリスクを90%抑え、同様の結果はスウェーデン、デンマーク、フィンランドなどからも報告されています。日本では小学校6年生から高校1年生相当までの女性が定期接種対象となっていますが、先進国のなかでも接種率が低いことが課題となっています。B型肝炎ウイルスは、主に母子感染や感染している人の血液や体液と接することで感染します。生後もしくは介護や医療に関わるかたはあらかじめワクチンを打っておくことで感染を防ぐことができます。

※がんに進行する可能性がある細胞や組織の異常

感染症の治療で防ぐことができるがん

ピロリ菌を持っていると10年後には3%のかたが胃がんを発症し、また胃がんのかたの99%にピロリ感染が関連していることが明らかになっています。ピロリ菌はいくつかの抗菌薬と制酸剤を組み合わせることで90%以上の確率で治療をすることができます。

おわりに

必要な時期に必要なワクチンを打つこと、健診などでがんにつながる感染症を持っていないかを確認することが将来のがん予防につながります。感染症への理解を深めることは、私たち一人ひとりができる大切な健康づくりの第一歩です。

Information

予防医学が紡ぐ幸せな健康未来
～みどり市民病院の挑戦～

人生100年時代、自分自身はもちろん、大切な家族の健康を守る予防医療。大切な人の【小さな異変に気付く】【ちょっと生活習慣を見直す】きっかけを見つけてみませんか。